

言語訓練のつえ、ペーシングボード

小声で早口になりがちなパーキンソン病などの患者が、よりのほっきり話せるようになるリハビリ器具「ペーシングボード」が広がりつつある。細長い板を等間隔に区切って色分けしたもので、一色ずつ指さしながら話すこと効果があるといい、患者や家族からの期待が高まっている。

(前田利親)

新潟市の下越病院でリハビリをしている主婦、加藤芳江さん(56)は3年前に、パーキンソン病と似た症状の難病、多系統萎縮症にかかり、はっきりと言葉を話すことができなくなかった。

口の筋肉をうまく動かさず、話すスピードが制御できないため、小声で早口になってしまふ。話を理解してもらえないため無口になってしまふ。

しかし、同病院で1年半前からペーシングボードを使って訓練を受けた結果、改善した。

ペーシングボードは、長さ約30センチの細長い板を赤、緑、黄など7色に塗り分けたもの。それぞれの色を高さ1センチ

パーキンソン病 神経難病の一つ。高齢者に多い病気で、厚生労働省の2005年の調査では、全国に約14万人の患者がいる。手足のふるえや歩行困難などの症状がある。

パーキンソン病患者に効果

色指しつつ発音明確に



ペーシングボードを使って会話をする加藤さん(右)。会話のスピードを遅くして、はっきりと話せるようになった(新潟市内で)

の板で仕切っている。

ペーシングボードの色を一つずつ指さしながら「わ・た

・し・は」などと区切って発声すると、話の速度を遅くして、明確に話すことができるようになった。

「姉と電話で話したら『前よりのほっきり分かるようになった』と言われました」と喜ぶ。

ペーシングボードは約30年前にアメリカで最初に作られ、欧米で1980年代から広まった。日本でも、言葉の訓練や指導を行う言語聴覚士

が、言葉のリハビリに使い始めている。

対象となるのは、パーキンソン病などで神経や筋肉に障害があり、うまく言葉を話すことができない患者。口腔がんなどの後遺症で言葉に障害のある人には効果が薄い。

普及に尽力する新潟医療福祉大准教授の西尾正輝さんによると、「言語聴覚士の指導が望ましいが、単独でペーシングボードを使いこなして、はっきり話せるようになるケースは少なくない」という。ボードを使っているうちに、

ボードなしでもゆっくりと話せるようになった事例もある。

脳の機能障害

に詳しい姫路独協大医療保健学部准教授、福永真哉さんは「ペーシングボードはつえや眼鏡のようなもの。完全に元通り話せるようになるわけではないが、患者に残っている話す能力を最大限生かすことができる」と話す。

ペーシングボードと携帯型ボード、説明書の3点セットが、インテルナ出版(東京都豊島区)から販売されている。2625円(税込み)。問い合わせは同社(電話03・3944・2591、ファクス03・5319・2440)